

平成 28 年度「ふくしまを知る連続講座」第 2 回

「引札」が語る商業のまち 福島の歴史Ⅱ

講師：柴田俊彰氏（福島市史編纂室）

開催日：平成 28 年 10 月 23 日（日） 参加人数：40 名

本講座は 10 月 7 日（金）～11 月 3 日（木）に当館展示コーナーで開催された「ふれあい歴史館移動展 引札Ⅱ」の関連講座として行われました。

「引札」の語源は「客を引く」説と古くは配ることを「引く」と言い「配る札」説があり、商店が開店や商品売り出しのために顧客に配った印刷物で、現在のチラシに相当するものです。始まりは宝永年間（1704-1710）と言われ、近世から近代の商業を知る重要な手がかりとなります。さらに、アートとしての見方や印刷技術の発達を見ることも出来ます。



塚屋作太郎・福島市柳町 [福島市教育委員会蔵]

描かれているのは、福の神など縁起のよいものや当時の世相や関心が色濃く反映したもの、歴史上の人物、暦など役に立つ情報、様々なものをモチーフに作成されています。なかでも商店が年末年始に顧客に新年の挨拶を込めて配った「正月用引札」は色鮮やかな一枚摺りのもので数多く出回りました。



きよ松商店・飯野町 [福島市教育委員会蔵]

引札に影響を与えたもの一つに活版印刷の導入が挙げられます。明治 30 年前後から大阪や東京の大きな印刷所が見本帳を作り各地の印刷所へ送り注文を取ったもので、地元印刷所ではそれに店名や商品名・住所などを刷り込んで販売するようになりました。当時の地元 福島にあった印刷所をいくつか紹介します。

「竹内活版舎」は創業明治 16 年、福島民報の創刊号から第 7 号までを印刷し、伊達郡安達郡大沼郡など広範囲に営業を展開していました。

「山口保命堂」は創業明治 20 年、売薬業を行っていたので薬の袋を印刷するために印刷業を兼営し、県内初の石版印刷を始めました。「共益舎」は明治 25 年、福島町役場助役にあった旧会津藩士 草刈三郎が知人と共同で開業し、その後活版印刷も始めました。印刷所と商店の関係から流通が広域的に行われていた実態がわかります。

引札は、庶民の購買力が向上しつつある経済の発展に伴い当時の人々のニーズを映す鏡として貴重な史料と言えます。

（地域資料チーム 原馨） 喜多屋呉服店・福島市大町 [古閑裕而記念館蔵]



医学者・野口英世を支えた人々 ～感謝とともに成長～

講師：森田鉄平氏（野口英世記念会）

開催日：平成28年11月19日（土）参加人数：20名

2016年の野口英世の生誕100周年を記念して、当館では11月5日（土）～12月27日（火）の約2か月間、野口英世関連所蔵資料の展示を行いました。この展示では野口英世を支え、助けた人たちの紹介と、野口英世の学術的業績をテーマに展示資料を選定しました。

展示期間中の11月19日、猪苗代町にある野口英世記念館の学芸員、森田鉄平氏を講師にお迎えし野口英世本人の生涯と、家族、恩師、友人たちとの関わりについてご講演いただきました。

野口英世を支えた人物として、まず思い出される母・シカ。彼女は幼いころから奉公に出て家計を支えるなど大変苦勞して育ったこと、英世が成長したのは、産婆の資格をとって2000人あまりの子どもを取り上げたこと、観音様を深く信仰し、英世が帰国した際の願いは中田観音と一緒に参拝してもらったことだったなど、英世の母としてだけではないシカ自身の人生や彼女の性格の伝わってくるお話しでした。さらに小林栄、渡部鼎、サイモン・フレクスナーなど、英世の人生の重要なポイントで彼を支えた恩師たちについてのお話や、英世の火傷をした左手が写った貴重な写真の紹介もありました。参加者アンケートでは「野口英世についてよりよくわかるようになった」「英世を身近に感じるようになった」といった感想をいただきました。



（地域資料チーム 田中信乃）

名所図会の世界

～ふくしまゆかりのものを中心に～

講師：渡邊智裕氏（福島県歴史資料館 副主幹兼専門学芸員）

開催日：平成29年1月22日（日）参加人数：44名

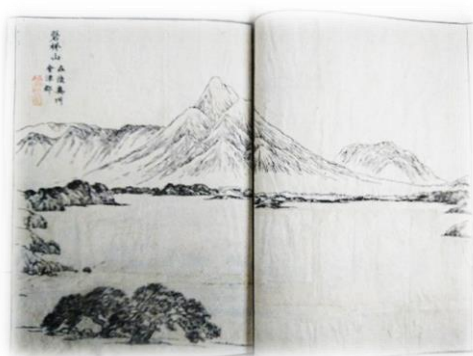
本講座は、1月6日（金）から2月12日（日）にかけて当館の展示コーナーで開催された、「名所図会の世界—江戸時代の観光ガイドブックス」（歴史資料館移動展）の関連講座です。江戸時代の名所図会出版の歴史とその意義を概観し、福島県ゆかりの名所や人物を取り上げている資料を、画像を見ながら詳細に解説していただきました。

名所図会は、江戸時代後期に盛んに出版され、寺・神社、歴史的な名所、名勝地、特産物等が描かれています。1枚ものではなく和本の形式で、当時のことを知ることができる資料です。以下、講座で取り上げられたもののうちいくつかを紹介します。

『名山図譜』は、陸奥国南部の医者川村元善（錦城）の編で文化元（1804）年秋に刊行された日本の名山に関する図録集です。絵は白河藩のお抱え絵師だった谷文晁により、一部弟子の白雲が描いたものも含まれていたと言われています。描かれている87座88図のうち、福島県関係は、半田山、磐梯山、吾田多良山、小野岳、二股山、朝日岳の6図あります。文化9（1812）年に元善子息の川村博が『名山図譜』に2図を増補し、新たに刊行したのが『日本名山図会』です。

『山水奇観』は、全国の著名な山水に関する名所図会です。寛政12（1800）年、享和2（1802）年に刊行されたもので、著者は淵上旭江（禎）です。写実的な山水図に関連する漢詩が添えられているのが特徴です。福島県関係は東山道に含まれており、後編三巻には柳津が描かれています。

名所図会の中には、『江戸名所図会』など比較的知名度の高いものがある一方、『山水奇観』『二十四輩順拝図会』など福島県内でこれまであまり注目されてこなかった資料もあります。その他、奥州の歌枕が多く取り上げられているなど文学に重点を置いた『東国名勝志』や、東国の名所に関する随想集で、地の文（解説文）が特徴的である『東国旅行談』などがあり、それぞれの資料の特徴に注目して見ていくと興味深いものです。



『日本名山圖會 卷一』より 磐梯山
（谷文晁／著 千鍾房 1804）

（地域資料チーム 二階堂千紘）